

特集

グローバルゼーション



一橋大学大学院
社会学研究科教授

伊豫谷 登士翁

大阪女子大学
女性学研究センター教授

足立 真理子

対談

女性、世帯、グローバルゼーション

グローバリゼーションとは何か—— さまざまな領域でのグローバリゼーション論

伊豫谷 グローバリゼーションという言葉が初めて使われたのは、1960年代半ばといわれていますが、今日のような意味で一般化したのは80年代に入ってからです。ヨーロッパやアメリカの景気が悪く、逆に日本の景気がよかった80年代の初めごろに、日本では、「Japan as No.1」や「日本の国際化」といわれ、その中で主に経済との関わりでグローバリゼーションという言葉が流布しました。さらに90年代に入ると、「グローバルスタンダード」という言葉の流行とも結びついて定着することになりました。近年では、文化やメディア、政治など幅広い分野でグローバリゼーションが議論されるようになってきました。

しかし、グローバリゼーションという言葉は、冷戦体制の解体、バブルの崩壊と不況の深刻化によって、ネガティブな意味へと大きく変化してきました。

「グローバリゼーションとは何か」は大きなテーマですが、ここで考える必要があるのは二つの点でしょう。

一つは、グローバリゼーションとして考えられていることが、政治・経済や文化などの個々の分野の間でズレを伴っているという点です。例えば政治学では、サッチャーやレーガン以降の新自由主義の台頭を転機として、主権国家体制の揺らぎを考えていますし、経済に注目すれば、60年代末から70年代初めのIMF体制が崩れてくる中で変動相場制になり、オイルショックを経験した大きな変化がポイントです。高度成長が終わり、多国籍企業やEUが登場し、南北問題が一般的になったのもその時期で、それ以降の展開をグローバリゼーションと捉えています。

また、政治や経済に対して、IT、情報、メディア、そして大衆文化のあり方などの文化的な変化をグローバリゼーションと捉える考えもあります。今、グローバリゼーションを考える場合に、政治・経済的な意味と、文化的な意味でのグローバリゼーションを、どのように共通した土俵で

捉えるのかという問題があります。

もう一つの大きな問題領域は、グローバリゼーションというものの核心は何か、そしてそれほどのような意味をもつのかということです。いま進行しているのは、「領域性」(テリトリアリティ)の解体ということができます。これまでの社会科学や人文科学が暗黙のうちに前提してきたナショナルな知のあり方ではこの事態は捉えられず、これまでの「方法的ナショナリズム」の組み替えを行いながら新しい知のあり方を構築することが課題となっています。

では、本日のテーマである「女性、世帯」とのかかわりから、グローバリゼーションの時代と呼ばれる課題をどのように設定するのか、という点から入りたいと思います。経済のグローバリゼーションは、1960年代以降の発展途上国を含めた世界経済の統合化の新しい局面、すなわち投資や貿易、多国籍企業の活動を中心に捉えられてきました。現在は、そうした新しい局面の延長上に捉えることができるのかというとそうではなく、ここ10数年の間に新たな状況が展開しつつあると思われます。

グローバリゼーションの展開と その最新局面をどう捉えるか

足立 グローバリゼーションの時代画期を、60年代後半とみるのか、あるいは80年代とみるのかという問題がありますが、サスキア・サッセン¹⁾は、最近30年間ぐらいの市場経済や資本主義の変化をグローバル資本主義と把握した上で、フェミニスト分析における中心的な課題を取り出しつつ、ほぼ3つの時期に分けています。最初の時期は、1970年代後半までの、古典的な第一次産品を周縁諸国が生産し、中心部の経済が世界市場向けの工業製品をつくるという、古典的国際分業がなお主流であった時期です。

それ以降に生み出された、生産の国際化を機軸とする、いわゆる新国際分業、NIDL体制の中において、例えば中心-周縁部双方において、女性の労働力がどう配置されているか、国民国家の

枠組みの中での労働市場に対する影響はどうか、という議論は、国際経済の枠組みの変化を受けた形で起きてきました。そして、現在の課題は、グローバル資本主義の最新局面、90年前後から起こったことといえるでしょうが、その特質をどのようなものと見ていくのかだと思われま

す。90年代の後半でも、フェミニズムの議論にかぎって言えば、グローバリゼーションの最新の局面について、70年代以降あるいは80年代以降のグローバル資本主義の進展過程がそのまま進化または発展した形態だという理解のされかたが多かったのですが、現在はそういう理解をする論者は少なくなっています。

伊豫谷 問題は、グローバリゼーションの最新局面が何であるのか明らかにすることでしょう。60年代、70年代における世界経済の統合化を推し進めた主体は、明らかに多国籍企業です。多国籍企業による統合化は、二つの点で世界経済の編成を大きく変化させました。ひとつは、これまでの国民経済を単位として、その相互間の貿易による世界経済から、生産拠点の国境を越える拡大を通じた世界編成への変化です。経営支配を目的とする直接投資をすることで、在外生産による世界的な分業体制をつくり上げたのです。もうひとつは、これまで一次産品や原料の産出地であった発展途上国あるいは旧植民地地域を製造業の生産拠点に組み込んだことです。このことによって、製造業という、生産立地の自由度の最も高い産業分野を含めて、発展途上国までもが世界経済の中に組み込むことが可能になったということです。

世界経済全体から見れば、膨大な低賃金労働力が発見されたのが、1960-70年代であるといえます。これは、これまでの国際分業に代わる「新しい国際分業」と呼ばれてきました。途上国からすれば、無尽蔵の低賃金労働力が最も国際競争力のある商品として現れてきたこととなります。その形態の典型が輸出加工区です。以上のことを前提とした上で、80年代・90年代に資本主義はどう変わったのでしょうか。

足立 80年代には、世界的に新国際分業体制が

でき上がっていたと地域実証研究では論じられています。重要なのは、新国際分業の体系ができ、中心部の資本主義が生産拠点を周縁地域につくり出していったことです。この体系の末端の労働力となったのは女性でした。しかも、同じ体系において、先進諸国の側では、周縁地域で生産される世界向け商品を購入するために、既婚女性が、家計補助的労働力とみなされ充当される。その結果、新国際分業の先進国側と周縁地域側の両端でともに女性労働力が「再発見」され、統合されることになったのです。このことは、80年代におけるフェミニズムやジェンダー研究の基本的なテーマでした。

先進諸国では、男性の基幹的な労働力と女性の補助的なパート労働が世帯において組み合わせられて、世界市場向けの商品を購入するという形になります。したがって、近代家族（の変形形態）が世帯主義を通じて維持されつつ、新国際分業の中に組み込まれます。問題は、この形が90年代以降のグローバリゼーションの最新局面においてどのように変化しつつあるのかという点です。

伊豫谷 この最新局面を考えると、論点が二つあると思います。一つは、資本主義での富の形成、あるいは資本蓄積のあり方が、60-70年代の世界的な統合化を前提としつつも、80年代から90年代に大きく変わってきたという点です。これまでのようなモノやサービスの生産過程において富が産み出されるのではなく、情報や金融やコンセプトなどの記号を生産する過程を通じて富が生み出されるようになりました。いうなれば、財やサービスの生産そのものを資本蓄積の過程から切り離すことが可能になったということです。このことは、さらに、生産への動員を基本に創り上げられてきた近代の社会秩序が大きく変質するような条件ができているわけです。

もう一つは、従来資本蓄積に必要な労働力は国民経済の中で再生産されてきましたが、90年代になって労働力の再生産そのものが市場化・グローバル化してきたという点です。この二つの点が、従来の世界経済の編成を決定的に変えてきていると考えられます。

足立 グローバルな資本主義の中心を牽引しているものが、モノの生産から遊離した架空資本の動きの操作に移行しているとは思いますが。サッセンは、最新局面のグローバリゼーションの特徴をモノの生産からのシフトとして、金融-情報複合体の動きとして、これを狭義のグローバル資本と規定したほうがいいのかもかもしれませんが、そこに焦点を当てて考えているといえます。

そして、この場合問題なのは、この最新局面におけるグローバリゼーションの進展は、資本主義市場経済それ自体をより不安定化させる方向に向いているのではないかということです。それは、金融の不安定性の進行という側面、あるいはモノの生産のグローバル化のみならず、人間が生み出される再生産の過程をも含んでグローバル化される形になっており、グローバリゼーションはそのような多重の層をもつものとして捉えることができます。

伊豫谷 今は主に経済面について話をしていますが、国民国家の変化とのかかわり、さらに最近の文化面のグローバリゼーションと経済のグローバリゼーションとのかかわりなど、さまざまな面を視野に入れないと、グローバリゼーションの最新局面は明らかにならないでしょう。一気にグローバリゼーション研究がそこまで行くことは難しいでしょうが、資本蓄積のあり方の変化と、それに対応する労働力がどう生み出されてくるのかという点は、家族や共同体といわれてきたものの変化、そしてそれらを支えてきたイデオロギー装置、ジェンダー関係への影響と深くかかわります。こうしたことが、今後の研究の主題になるでしょう。

「移民の女性化」にみる グローバリゼーション

伊豫谷 サッセンの議論で焦点の一つになるのが移民の問題です。「移民の女性化」としばしば論じられますが、これは単に移民の中で女性が増えたということではありません。移民として表れてくる世界の編成のあり方が基本的に大きく変わっ

てきたことを表しています。これまでの議論とのかかわりでいえば、二つの点で押さえておくべきです。

一つは、現代の移民は、「もはや帰る場所を持たない移民」だという点です。単純化していえば、従来の還流移民は、自分の出身地域の共同体や家族を維持するために移民し、いずれは出身地に戻るという形でした。移民送金によって、出身地の家計が維持されるわけです。ところが今の移民は、出身地で商店や畑などの生存手段を失い、帰るべき場を持たないという特徴があります。

もう一つは、これまでの移民は基本的には生産労働を担う者として捉えられてきました。ところが、今は生産労働の移民から、ケア労働などの再生産労働の移民に大きくシフトしています。

この二つの特徴を典型的に示すのが、「移民の女性化」です。80年代以降、移民を送り出す地においても、受け入れ地においても、世帯が大きく変化しました。その世帯の変化と移民の女性化が同時に進行しており、そこを明らかにしていくと、グローバリゼーションのもう一つの側面が明確になります。

足立 再生産領域のグローバリゼーションは、グローバリゼーションの最新局面の重要な点です。先進諸地域の各世帯が男性・女性ともに働く、とりわけ雇用労働につくという形をとればとるほど、その近代家族の内部の家事労働やケア労働が外に押し出されることとなります。この場合重要なのは、この押し出された部分が、一般の商品の購入によって代替されるということと、労働それ自体が商品化されるということの決定的な違いでしょう。その部分が、特に周縁諸地域から先進地域に移動している女性労働力によって担われ、その移動している女性の担っていたケア労働が、周縁諸地域に生活する女性たちによって担われるという—私はこれを、再生産連鎖と呼んだことがあります—そのような分業体制が起きてくるのです。これが「ケアのグローバリゼーション」という側面です。

女性労働力の移動は複雑になっています。必ずしも世帯の中の1人だけが送り出されるわけ

はなく、ある人は香港へ行き、ある人はサウジアラビアへ行き、ある人は東京へ行くという形で国際的に広がり、それぞれのところから送金を続けるようになっていきます。送金は、象徴的ないい方ですが、出身国にいる「母（グランドマザー）」に向けられます。このネットワークの「かなめ」になるのはこの人です。出身国の世帯がバラバラになったのではなく、国際的に拡大・連携した形でネットワークを組み、生活を維持する形態をとるようになりました。

このことを考えると、受け入れ側の先進地域においても、世帯や家族が個人単位化する方向に向かっていくといえるかについては疑問があります。グローバル資本主義の展開に伴い、家族全体を養う賃金を男性が稼ぐことができた従来の形が解体し、世帯の複数の人が就労するようになりますが、その過程で、「家族」という言葉が表そうとしていた相互依存性の部分は、ただ個々人に分解されて解消していくのではなく、むしろより新たな異なる形へ再編されるといえるのではないかと。女性の移動を追っていると、そうした面が見えてきました。

伊豫谷 実際、送り出し国の側では、家族の形にそうした動きの影響が及ぶことが日常的になっています。フィリピンのスラムでも、海外に出かけたことがある人は例外的ではなく、普通にいるわけです。これらは、農村から都市へと出てきた人たちです。「かなめ」になる人を中心にして擬似的な大家族がスラムででき上がっています。途上国では、むしろ農村で小家族化が進み、大都市のスラムで大家族化が進んでいるという逆転現象が起こっているように思います。

世界的な女性間分業という形で展開する 再生産領域のグローバリゼーション

伊豫谷 サッセンは、アメリカのローカル市場の中での移民のネットワークの形成を扱った論文の中で、移民は各々の出身地によって就く職種も違えばネットワークの形成のあり方も違うが、しかしながら女性移民に焦点を当ててみるならば、

きわめて似通った職種に就き、共通した問題を抱えている、と指摘しています。

移民によって就く仕事が変わっているにもかかわらず、その中で女性移民の多くが、共通して、家事労働やケア労働のような再生産の領域の仕事に入ってくるということは、何を意味しているのでしょうか。再生産の領域と生産の領域の差は为什么呢。

生産の場は、一定の規律の中でいや応なく組織化される場です。しかし再生産の場は、ケアであれ家事労働であれ、生産が行われる場のような規律で労働力を組織できません。しかも、直接消費者と接触し、その消費者は多種多様でマニュアル化できません。それだけに、法的な保護も公的な監視も及ばず、暴力や違法行為も起こりうるわけです。

移民の労働が生産の場から再生産の場へと移ることは、移民が受け入れ社会の中にどのように入っていくのか、移民のネットワークやパターンがどのように変化するのか、といった新しい問題を提起することになります。これまでの男性移民を中心に考えてきた移民パターンやサイクルは大きく変わらざるを得ないでしょう。

いうまでもないことですが、再生産にかかわる労働というのは、世界経済のなかで最底辺の労働と位置づけられています。女性が移民として移動することは、世界的な意味で最も底辺の労働力として移動するということです。しかし、それは決して固定的ではなく、ダイナミックな面を含んでいると考えています。このことの意味を考えないと、今後の展開や世代が交代したときの動向が、つかめなくなります。彼女らがいつまでも固定的な家族のつながりの中にいるとは思えないからです。

足立 生産領域だけではなくて再生産領域にまでグローバリゼーションが及ぶ中で、ケアをめぐるグローバリゼーション、つまり、先ほど述べた再生産連鎖は、世界的な女性間分業として展開しています。いま、女性間といいましたが、このいい方はすでに正しくないでしょう。つまり、ジェンダーの再配置ではありませんが、再配置された

ジェンダーは、個体としての女性を表していないからです。

伊豫谷 それに付け加えますと、送り出し地では、今度は自分たちよりもさらに下の労働力を雇って再生産の領域の仕事をさせています。

足立 実はそういう例が非常に多いのです。移住する女性は、都市の中産階級出身でかなり高学歴という場合もあるので、出身国では自分がいない家庭にさらに当地へ移動してきた女性を雇うということはよくあります。また、逆に、出身国ではむしろ家事労働を自分のすべき労働とみなさなかったような高学歴の女性が、移住先で家事労働者となる。このような事態をラセル・パレーニャス²⁾が「矛盾する階級移動」としてとりあげています。

具体的な話をすると、この前フィリピンのアロヨ大統領は日本にケア労働者の受け入れを要請しました。そこでケア労働者として想定されているのは、看護大学を卒業している20歳前後の女性です。こうした女性の大学の教育費は、母親が香港などでケア労働をして仕送りをして捻出されてきたものです。その間は、祖母（グランドマザー）が、無償労働で育ててきました。つまり、日本がケア労働者として受け入れを要請されているのは、女性が3代かけて海外で働き、仕送りをして育てた娘です。この娘が日本で看護・介護労働者として働くことになったり、あるいはアメリカで初等教育の教育者になったりするわけです。

受け入れ国側の政策は国によって異なっていますが、強調しておきたいのは、送り出した側が3代という長い時間をかけて育成した労働力の流れですから、この動きを押し戻すことはできません。国内経済の好況、不況を理由に、その緩衝機能としてのみ扱うなどといったことはできません。この大きな流れを押し止めることは不可能です。

伊豫谷 アメリカなどでは、すでに再生産領域の労働を移民に依存せざるを得なくなっています。アメリカの場合、1960年代の女性の社会的進出を底辺で支えたのは移民女性による家事労働の代替でした。最初にメキシコなど中米地域から女性の再生産労働者を受け入れました。メキシコの場合、

70年代の早い段階で女性の占める割合が男性を上回ります。確かに、最初の時期はアメリカに入ってきた労働者が雇用されるのはIT産業や半導体などの製造業、ニューヨークならスウェットショップ（苦汗工場）などですが、70-80年代になるとケア労働に就くようになります。実際、フィリピンでは看護学校の卒業生の約7割は海外へ出かけています。

足立 フィリピンの看護学校には、国内需要をはるかに上回る数の学生がいます。

伊豫谷 フィリピン政府自身が、自国で一番国際競争力のある商品は労働力だという認識になっています。

足立 女性のケア労働者は競争力のある輸出商品なのですね。ケア労働者としてのアメリカへの移民は止められない動きです。ケアの国際移動だけ考えますと、アメリカでは高齢者が海外に移るという「輸出」さえも起こっています。これは、90年代の金融のグローバル化による、退職後資金の不安定化が一要因です。ドルの有効利用でしょうか。再生産領域において、ケアをめぐる人間の流れのクロスがみられるという事態からは、モノの生産を中心として組織化されていた、20世紀後半までの資本主義とは異なり、資本主義それ自体が、経済の領域にのみとどまらない形で再編されているということなのかもしれません。

「中心-周縁」という構図の解体

伊豫谷 これまでは先進国・発展途上国の「中心-周縁」として捉えられていましたが、ケア労働をめぐる国際的な連関を考えると、そのような見方も変わってくるのではないのでしょうか。発展途上国のフィリピンでも、ルソン島に対してほかの島からケア労働者が移ってくるなど、島々の中での階層化という現象がみられます。こうした論点は、ジェンダー研究とグローバリゼーション研究が交差する最も重要な問題のひとつだと思います。

足立 いうまでもなく、「中心-周縁」が、国民国家を所与の単位として、あるいは、国民国家の範囲を前提として構造化されていると把握する

ことはできないでしょう。

伊豫谷 私はすでに地理的な意味での「中心－周縁」の構図は解体されてしまったとみています。もちろん、機能的あるいは権力関係としての「中心－周縁」はなくならないのですが。

足立 そうですか。おそらく、伊豫谷先生と私の違いはここにあるのでしょうか。ケアという問題や、国際的に拡大・流動化する世帯／ハウスホールドという構造を視野に入れることによって、むしろ、地政学的な意味での、より具体的な位置、空間性の問題が露出するように思います。これは、サッセンのグローバル・シティへの批判に関連するのでしょうか。

伊豫谷 そうした事態は、もはや「中心－周縁」の構図では捉えられないでしょう。グローバリゼーションのもとでは、万国が互いに結びつき、生活様式でも、実際の移動時間においても、近似化して結びついてくる。だから、特定の都市と都市とが結びつきながらもそこから外れるところが生まれる。極端に言えば、今までの「中心－周縁」図式は、先進国と途上国を分ける見方でした。現在は、そうした区ができないグローバリゼーションが進行してきていると考えています。

だから、ケア労働の移動も世界都市へ移動があり、その世界都市の中でランキングがあり、そこからクロスで動いていくと考えたほうがいい。グローバリゼーションの中に包摂されない人々、あるいはそこから排除される人々の世帯がどう変わってきたのかが、もう一つの大きな問題です。

足立 グローバリゼーションを考えた場合、個人が単独に移動するという形を考えがちですが、私はそう考えません。個人が移動するときは、今までとは異なる集団を、新たな形態でつくることを常に伴うからです。つまり、移動とは、ある集団から個人が単独に移動するのではなく、新たな、慣習的な反復にすぎないかもしれませんが、集団をつくり出していく作業として捉えられるのではないのでしょうか。イメージとしては、「ある地点からある地点への移動」で「戻れるか戻れないか」が問題になるというよりも、むしろ集団性が拡張して、その末端に1人ずつが配置されている

という感じでしょうか。

伊豫谷 ある移民研究者は、人が動くのではなく、ネットワークが動く、とっています。しかし、その移動は、地理的には動きながらも、空間的には動いていないのではないかと、というのが足立さんの指摘でしょう。

足立 ネットワークのようなアメーバ状のものが流動的に動いています。この部分は、部分的には解体したり引き裂かれたりしますが、反対にむしろ凝集力が強まったりするわけです。

グローバリゼーションの中での 再生産労働の意味

伊豫谷 先程少し触れた点に話を戻しますが、最近、アメリカのアジア研究の担い手には多くの移民女性が見られます。事業に成功したり、高度な専門職に就く女性も増えています。これらの多くは、第2世代、第3世代であり、大学を卒業して、さらに研究者になる人がいます。もちろん、こうした移民は女性に限定はされないのですが、どうも女性の方が出身地の枠から自由なように思われます。

アイワ・オングの『柔軟な市民権 (Flexible Citizenship)』³⁾ という本がありますが、そこで取り上げられているのも高い学歴を得たアジア系の移民です。「柔軟」というのは、幾つも市民権を持って自由に動き回れるシチズン (市民) を想定した表現です。これまでシチズンやナショナルイティは、送出国あるいは受入国という特定の国に結びついた固定的なものと考えられていましたが、そうではない層が登場しているのです。おっしゃるように、海外に行っていないながらも、アメーバのように自国から伸びる家父長制のネットワークに縛られている移民女性が多いのは確かですが、それにもかかわらず、固定的で不自由なのかというと、必ずしもそうはいいい切れなのです。

そうした移民が具体的に働く場や生活の場を、これまでの送出国や受入国へのアイデンティティの一元化と捉えるのではなく、例えば「第三空間」といった概念で捉えられないだろうかと考え

るのが私の議論です。

足立 一つの世帯の中で、出国にアイデンティティを持っているケア労働者の女性と、企業社会にアイデンティティを持っているその地の女性とが、子育てや高齢者介護をする場面を介して出会っていくわけです。そのときに、明らかにこれまでの近代家族として閉じていた関係とは違う関係をつくらざるを得ないのではないのでしょうか。

伊豫谷 それは移民の世帯の話として展開していくのでしょうか。それとも彼女らを雇っている世帯の話になるのでしょうか。

足立 多分どちらでもしょう。送り出す世帯の側でも、送り出された女性が出身国の世帯にどの程度アイデンティファイしていくかが重要な問題になります。その点が、送金するかしないかに結びつくため、出身国の世帯のことよりも他のことに関心ができた途端に送金額が減ることになってしまいます。つまり、送り出された女性が、どちらの国にいる人々にアイデンティファイしているかによって、経済的な流れが変わってしまうわけです。しかし、おっしゃりたいのは、このどちらかへの一元的なアイデンティファイではないものが生まれてくる可能性についてなのではないでしょうか。

伊豫谷 一般的に男性のほうが出身地に対してのアイデンティファイが強く、きちんと送金する傾向が、統計的にみてもあります。ブラジルから日本へ来ている日系人もそうです。ブラジルに帰りたいかという質問をすると、女性よりも男性のほうが帰りたいという回答が多くなります。これは、女性の経済的・社会的地位が低く押さえられてきたことの反映だと考えられます。

女性は、これまで移民研究の中では周縁におかれ、最底辺の労働として捉えられてきましたが、現代の移民が持っている移動の特徴を最も体現している存在といえるのではないのでしょうか。そういう場として、再生産労働の場、具体的なケアの場を考えることはできるでしょう。もちろん、ケア労働にはドメスティックバイオレンスや違法な労働条件などの問題もあるのは事実ですが、それでもそこに可能性をみることはできないだろうかというのが、先ほどの質問の意図だった

のです。

足立 その可能性については、先ほど述べたパレーニヤスがnon-belongingsという用語を使用しながら指摘しているのですが。この主題は、やや異なる文脈で述べる必要がありますね。いずれにせよ、再生産領域のグローバリゼーションの中で、家庭の中に埋め込まれていた労働が、その家族の全員に対してアイデンティファイしているわけではない人ともに行われるようになるということは、人間が生まれて生活して死んでいくという局面に、非常に大きな影響を与えたいと思います。むしろ、国民国家内部における近代家族による労働力再生産＝国民の再生産という図式が、ある時期の資本主義の段階的特徴にすぎないとみることさえできるのかもしれませんが。

グローバリゼーションの中での国家の変容と新たな共同性の模索

伊豫谷 今お話したことは、次のように整理できます。近代においては、生命の再生産が労働力の再生産として行われ、それが国民の再生産として行われます。したがって、生命と労働力と国民の再生産が国家の介入によって一致させられるシステムが作り上げられてきたといえます。その完成形態が福祉国家です。福祉国家体制の中では、労働力の再生産、生命の再生産、国民の再生産がある一定の領域の中で完結していたのですが、現在その福祉国家体制がグローバリゼーションの中で崩れてきた。つまり、三つの再生産の間でズレが起っています。そのズレをどう捉えることができるのでしょうか。

足立 三つのズレが日常化した社会になっていくわけですね。今までのように、個々の再生産の過程をみるだけでは捉えきれない事態になっています。世帯は、その最も重要な焦点となるのではないのでしょうか。

伊豫谷 世帯とともに、かつての三者の一致の中で決定的な役割を果たしてきたのは国家です。現在の状況は、国家がその再生産過程の市場化を促すようになってきています。

国家が決定的な形で介入してきた領域は教育と衛生と安全の三つでしたが、現在国家は安全だけは手放さずに、教育と衛生については市場化を急激に進めています。極端に言えば、優秀な労働力は国内で調達しなくても、生産拠点を海外に移転する、あるいは海外からもってくればいい。金のある人がみずからの責任において優秀な学校に入り、こうした人だけを育成する。衛生についても、金のある人だけが高度な医療を受けられる。こうした選別が進むことによって、福祉国家体制の特徴であった三者の一致が緩んでいるのです。その中で、共同体的な結びつきとしてあった世帯は今後どう変わっていくのでしょうか。

足立 生命と労働力と国民の再生産という役割が近代家族から外されたときに、どういう共同性が残るのかを考えると、今までの家族が背負っていた人間の関係をすくい上げる集団性なりネットワークが形成されなければならなくなるでしょう。

伊豫谷 だからこそ、今グローバル化を研究する人は、公共性や地球市民などを盛んに論じ、新しい共同性を考えようとしています。従来、国境の中にとどまるものとして考えられていた共同性は、国境を越えた形で考えざるを得なくなってきました。人によっては、ほんの数ブロック先に住んでいる人よりも、海外の人の方がはるかに実質的に近いということもあります。共同性は、地理的な近接性でははかれなくなりつつあります。

足立 そうした面も確かにあると思います。単にある集団が単独に移動するだけではなく、先ほどお話したようにネットワークとして移動しているので、ある空間から別の空間に移るというよりも、グローバル化した空間の中でネットワーク同士が接触しているといえるのではないのでしょうか。パレーニヤスの議論では、出身地という背後を失い、行った先でも自分の場が持てない移民女性が想定されていますが、グローバル化の中で生み出されているものには、そうではなく国際的に拡大するネットワークの中の女性という面もあると思います。

家父長制イデオロギーの変容と共同性の多様化

伊豫谷 その中で、家父長制イデオロギーについてはどう考えられるのでしょうか。フェミニストの議論では、しばしば自明な概念として家父長制が出てきますが、家父長制イデオロギーがグローバル化の中でどう変わっているのか、それとも変わらずに強まっているのかといった議論は十分にされていないのではないのでしょうか。こうした点は、グローバル化の中で世帯の変化を考える上で鍵になると思います。

足立 私は大阪で生活していますが、その中で日常的に出会う人々に、30代のシングル女性たちがいます。彼女たちは、午前中はスーパーマーケットに勤め、午後からは別のところに勤め、夜はまた別のところに勤めるといった複合就労形態をとって生活している非正規労働の女性で、こういう人が非常に多いことに気がつきました。

彼女たちは、結婚への意思は非常に薄く、居住空間を共有する相手を探しています。しかし、居住を共有するからといって、それが近代家族のような形態に結びつくとも考えていません。私がよく話を聞かせてもらった女性も30代半ばですが、あまり年が離れていない女性3人で家を購入して共同で住むことを共通の目標にしています。3人合わせて共同の世帯のコストを払うので負担も少なくてすみます。

つまり、今までなら、家族という形を選ぶしかなかった女性が、家族形成ではない形での集団的な居住や生活を選ぶ例がみられるのです。家族形成の核になってきた近代的な家父長制イデオロギーも機能しなくなりつつあると思いますが、その結果みんな個人になってバラバラになるのではなく、別の形の共同生活が都市の中に生み出されているわけです。

伊豫谷 それはもはや家父長制イデオロギーとは呼べないですね。

足立 私はそう思います。伊豫谷先生がおっしゃっていた福祉国家のもとの生命・労働力・国民の再生産の三つがずれていく中で、何か別のも

のが新たな標準モデルとして出てくるのではなく、むしろ多様なあり方が出てきていると考えられます。従来標準モデル視されてきた日本の家族のあり方は、90年代に実はあまり崩れなかったと私は分析していますが、その維持が難しい状態になりつつあることは事実ですので、これから先は、家長制イデオロギーは機能するのが困難になっていくのではないのでしょうか。

伊豫谷 現在、多様な選択肢が生まれつつありますが、必ずしも多様なものが自由に選択できるものとして開かれてはいないと思います。そこが大きな問題です。移民に関しても、移動できる人とできない人とがいます。

グローバリゼーション研究のインパクトと課題

伊豫谷 移動研究を進める中で私自身が行き着いたのは、経済学をはじめこれまでの社会諸科学が、いかに強くナショナルな枠組みにとらわれてきたかということです。「世帯」や「女性」といった問題も、無自覚にナショナルな枠の中に押しとどめてきました。この枠組みを壊していかないと、今日話した問題は全く捉えられなくなっています。グローバリゼーション研究の課題には、グローバリゼーションとして何が起きているかを探るだけではなく、知の枠組みを組み替えることも含まれています。

足立 安定的な局面ではなくて、最も変化したり変動したりする局面、予測がつかない局面、そしてそれがどこで起きているかを探ることが課題になっています。だからこそ、今までの枠組みの中で何か説明しようとする、課題と枠組みがかみあわない結果になってしまいます。

例えば、移動する女性についても、その意味を

国民国家の枠組みの中での労賃の問題にとどめたり、労働力供給の逼迫を緩和する存在と捉えたりするだけでは、移動する女性がなぜグローバリゼーションの中で大量に出てくるかが捉えられません。

伊豫谷 これまでの移民研究でも、基本的には、国民国家の立場に立って、移民を管理する対象として捉え、どのような形で受け入れるか、あるいは受け入れないかという形でしか議論していません。だから、移動はある均衡からの逸脱であり、再び均衡をどのように取り戻すかという形での議論にとどまっています。移民政策として、移動する人の観点が全然入っていないのです。逆に、そもそも人間は移動するものだと考えて見直せば、事態は全く違ってみえてきます。そういう見方の転換が否応ない形で求められているのではないのでしょうか。

足立 社会科学全体が、そうした新しい課題に直面しているということですね。

※この対談は、2003年4月3日に行われたものです。

注

- 1) Saskia Sassen (シカゴ大学社会学部教授)。国際労働力移動、世界都市、ジェンダー分析を含む現代のグローバリゼーション研究の代表的論者。主著『労働と資本の国際移動——世界都市と移民労働者』（森田桐郎他訳、岩波書店、1992年）、『グローバリゼーションの時代——国家主権のゆくえ』（伊豫谷登士翁訳、平凡社、1999年）。
- 2) Rhacel Salazar Parreñas。国際労働力移動論、とりわけ移住女性家事労働者についての実証研究をおこなう。主著 *Servants of Globalization: Women, Migration, and Domestic Work*, Stanford: Stanford University Press, 2001.
- 3) Aihwa Ong, *Flexible Citizenship: The Cultural Logic of Transnationality*, Durham: Duke University Press, 1999.

(いよたに・としお) (あだち・まりこ)